

# カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 名詞句の構造

鈴木 博之

## 丹巴県のカムチベット語

カムチベット語は、チベット語分布地域の東部を占める地域で話される言語で、下位方言区分が多岐にわたり、方言差異の大きい言語として知られる<sup>1</sup>。その方言の多様性は、川西走廊諸語と呼ばれる非チベット語の分布地域と重なる部分もあって、複雑な様相を呈している。

四川省甘孜 [dKar-mdzes]<sup>2</sup> 藏族自治州東部の丹巴 [Rong-brag]<sup>3</sup> 県は、チベットの伝統的地域区分では「ギャロン [rGyal-rong]」に含まれる地域で、四土ギャロン語、ゲシツァ語、カムチベット語、アムドチベット語、そして漢語（西南官話四川方言の土地の変種）が話される。このうち本稿で扱うカムチベット語は県南東部で話され、またカムチベット語の中で独立した下位区分を形成する方言である (Suzuki 2008, 2009: 17)。当地では「二十四村<sup>4</sup>話(二十四村方言)」という名称で通っている。徐君 (2001) によると、章谷 [Rong-brag] 鎮、中路 [sPro-snang] 郷、水子 [Rwa-tso] 郷、岳扎郷、梭坡 [Sog-pho] 郷、格宗 [dGu-rdzong] 郷などで話されており<sup>5</sup>、話者数は30000人弱である。二十四村方言は大渡河 [rGyal-mo rNgul-chu] を基準として東西の下位方言に分けられる<sup>6</sup>。このカムチベット語分布地域は、言語分布の観点から見て、東側に四土ギャロン語、北側及び西側にゲシツァ語、南側にグイチョン語それぞれの分布地域と接しており、チベット語方言としては孤立した言語島を形成しているように見える。

本稿で扱う言語資料<sup>7</sup>は梭坡郷で話される Sogpho 方言で、漢語の質問文を口頭で翻訳した形式と自然発話に現れる形式の2種類である。音表記は付録2の音体系に記述されるものによる。

<sup>1</sup> カムチベット語の方言分類の全体像は、Suzuki (2009: 17) が川西民族走廊（四川省および雲南省）の範囲内の見解を提示している。その後数々の修正を加えたが、丹巴県の方言についての見解は今なお有効である。

<sup>2</sup> チベットの地名など固有名詞で語源が分かっているものには、[ ]内にチベット文語形式（藏文）を添える。

<sup>3</sup> 正式名称は *Rong-mi Brag-go* である。

<sup>4</sup> この名称は、明清時代に行われた土司制度の行政区分で24か村で通用していたということに基づいて名づけられたという。

<sup>5</sup> 次頁の2枚の地図を参照。

<sup>6</sup> 二十四村方言のうち、筆者は章谷鎮、中路郷、梭坡郷、格宗郷の各方言を調査した。各方言の対照研究に鈴木 (2007) と Suzuki (2008) がある。

<sup>7</sup> 筆者の調査協力者は肖松英さん（女性）で、梭坡郷莫洛 [Bo-lo] 村の出身である。



図1 中国西南部における梭坡郷の位置



図2 丹巴県中心部におけるRongbrag方言群の分布

\* 2枚の地図は Geocoding (<http://ktgis.net/gcode/index.php>) を用いて作成した。

語順は動詞（句）が文末にくるのを基本とする。発話によってはそうでない場合もある。また、名詞句内の修飾構造は修飾語が被修飾語に後置されるのを基本とするが、特定の接辞を用いて前置される場合も認められる。この場合、修飾句は主部内在型という形をとりうることもある。

## 1. 名詞句の構成要素

ここでは名詞句の構成要素とその形態論について記述する。名詞句を構成する要素には、次のようなものがあげられる。

- |        |              |
|--------|--------------|
| 1. 名詞  | 5. 数詞 / 数量表現 |
| 2. 代名詞 | 6. 形容詞       |
| 3. 指示詞 | 7. 名詞化接辞     |
| 4. 類別詞 | 8. 格標識       |

以上のうち、名詞、代名詞、名詞化接辞を伴う名詞句が一般的に中心語になることができる。これらの要素について、形態論的特徴と名詞句内での役割をそれぞれ見ていく。

### 1.1. 名詞

名詞を形態的に定義することは困難である。以下のような形態が認められる。

1. 1 音節語  
`nā「天」、`mi「火」、`s<sup>h</sup>o「土」、<sup>o</sup>gu「頭」、<sub>o</sub>mə「人」、<sub>o</sub>p<sup>h</sup>a?「ぶた」
2. 2 音節語（2 音節語幹または複合語）  
<sup>h</sup>ts<sup>h</sup>a e<sub>l</sub>「温泉」、<sup>h</sup>lu? p<sup>h</sup>ō「体」、<sup>h</sup>t<sup>h</sup>e<sup>h</sup>u<sup>h</sup> pu<sup>h</sup>「あごひげ」、<sup>h</sup>dz<sup>h</sup>u mə「腸」、<sup>h</sup>po ma「チベット人」、<sup>h</sup>rə mō「うさぎ」
3. 2 音節語（1 音節語幹＋接尾辞）  
`ni mo「太陽」、<sup>h</sup>ke? po「腰」、<sub>o</sub>p<sup>h</sup>a? mo「母ぶた」
4. 2 音節語（接頭辞＋1 音節語幹）  
<sup>h</sup>ʔa mji「祖父」、<sup>h</sup>ʔa <sup>h</sup>ko「兄」、<sup>h</sup>ʔa zō「母方のおじ」
5. 3 音節以上の語  
<sup>h</sup>ta <sup>h</sup>po ʔo ma「しわ」、<sup>h</sup>ʔa t<sup>h</sup>a t<sup>h</sup>a「蜘蛛」、<sup>h</sup>ʔo? ma tse「蟻」

名詞は名詞句の中心語を構成し、文や節においてさまざまな格標示を受けることによって文中の役割を果たすものを名詞句ととらえ、主部になることができるものといえる。

## 1.2. 代名詞

代名詞は人称代名詞と指示代名詞に分かれる。疑問詞のうち、代名詞と同じふるまいをするものも含まれる。

人称代名詞の単数については、格標識が後続するときに音形式が変化する。また、1, 2 人称能格の場合は格標識 /gə/ は用いず、1 音節形式となる。整理すると以下のようなになる (鈴木 2010)。

格	格標識	1 人称	2 人称	3 人称
絶対格	無標	ʼŋə / ʼŋo	ʼtʰaʔ / ʼtʰaʔ	ʼti:
属格	ce	ʼŋ ce	ʼtʰiʔ ce / ʼtʰiʔ ce	ʼtə ce
能格	gə	ʼŋeʔ	ʼtʰeʔ	ʼtə gə
その他	lə (/ de / nə / sʰo)	ʼŋə lə	ʼtʰa lə	ʼtə lə

表1 人称代名詞単数の格変化

代名詞が中心語になる場合、格標識を除く他の要素は同一の名詞句内に現れない。

## 1.3. 指示詞

指示詞には /nə/ (近称) と /ti:/ (遠称) が認められる。

指示詞は中心語の前後に現れ、単独では名詞句を構成できない。/nə/ は中心語に先行することが多く、(遠称) は逆に中心語に後続することが多い。文法的に語順が決まっているわけではないようである。

## 1.4. 類別詞

類別詞は度量衡の単位を表すものがほとんどである。単独では名詞句を構成できない。

## 1.5. 数詞 / 数量表現

数詞はすべての基数、および特定の数量表現が含まれる。

## 1.6. 形容詞

形容詞も名詞と同じく、形態的に定義することは困難である。以下のような形態が認められる。

### 1. 1 音節語

ʼtʰa 「大きい」、ʼtʰü 「小さい」、ʼtʰu 「高い」、ʼtʰü 「短い」、ʼne 「よい」

### 2. 2 音節語 (2 音節語幹または重複)

ʼta<sup>h</sup>ceʔ 「中間の」、ʼko<sup>h</sup>ko 「丸い」、ʼsʰoʔ<sup>h</sup>sʰoʔ 「平たい」、ʼkʰa tsʰi 「からい」

## 3. 2 音節語（1 音節語幹＋接尾辞）

ˈtõ bo 「からの」、ˈma pu 「赤い」、ˈŋã bu 「緑の」、ˈsʰa po 「新しい」

## 4. 3 音節以上の語

ˈŋã bu ˈnã bu 「青い」、ˈdaʔ gu ro wo 「急ぎの」、ˈtɕʰeʔ pə ˈka su 「まあまあの」  
名詞句に現れる形容詞は修飾用法で用いられる。詳細は3節の修飾構造を参照。

## 1.7. 名詞化接辞

名詞化接辞は動詞または形容詞に付加されることによって、名詞と同様の統語機能が与えられる。よって、名詞句の中心語になれる。ただしそのふるまいは名詞とは異なる。一方で修飾語にもなることができる。この点の詳細は2節の名詞句の内部構造を参照。

頻繁に見出される名詞化標識には /ma, mwə/, /zu/, /sʰo/ がある。/ma, mwə/ は基本的に「人」「事物」「道具」を表し、/zu/ は「事物」を表し、/sʰo/ は「道具」「場所」を表す。形容詞の名詞化は「事物」を表す場合は接尾辞 /re: mə/ を、「人」を表す場合は接尾辞 /mə/ 用いる。

名詞化前	名詞化後
ˈnã 「読む」	ˈnã-ma 「読む人」
ˈso 「食べる」	ˈso-zu 「食べもの」
ˈse ˈso 「ごはんを食べる」	ˈse ˈso-sʰo 「箸」
ˈtɕʰɿ ˈtʰõ 「水をくむ」	ˈtɕʰɿ ˈtʰõ-sʰo 「井戸」
ˈka: pu 「白い」	ˈka: pu-re: mə 「白いもの」
ˈtɕa: 「大きい」	ˈtɕa:-mə 「大きい人」

表2 主要名詞化接辞一覧

動詞の名詞化について、判断動詞と存在動詞は名詞化しえない<sup>8</sup>。動詞語幹に TAM 標識が付加された状態では名詞化接辞が後続できない。

## 1.8. 格標識

名詞句は基本的に文の構造に従って格標示が行われる。格体系と格標識の形態に基づく一覧は以下ようになる（鈴木 2010）。

音声形態をもたない格に絶対格 (ABS) と場所、時間などを示す場合の位格 (Loc) がある。後者については語釈に反映されないが、理論的には位格におかれていると理解できる。格標識は名詞句の文中での役割を反映するものであるから、厳密には名詞句を構成する要素であるとはいえない<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 形容詞用の名詞化接辞 /re: mə/ の第1要素は藏文 red と関連するかもしれないが、Sogpho 方言では red は判断動詞として用いられない。鈴木 (2013) 参照。

<sup>9</sup> それゆえ、格標識を伴う句を「格句」と呼ぶなどの観点もある。

形式	SAP 標示	非 SAP 標示
ce		属格
gə / γə	能格	具格
lə / la / lo	与格	位格, 与格
de		奪格
nə / nō		内格
s <sup>h</sup> o		所格
無標 (φ)	絶対格	

表3 格標識一覧

呼びかけなどの場合、名詞だけで成立する1語文が認められる。呼格は文法上の格標識に含まれず、また音形式を伴う格標示は行われないため、便宜的に絶対格で現れていると解釈するが、語釈に反映されない。

### 1.9. そのほか

主題標識 /da/ は厳密には名詞句の内部構成要素ではないが、各名詞句の格標示に後続する位置に置かれる。このため、名詞句と密接にかかわっていると見える。

## 2. 名詞句の内部構造

ここでは、名詞が中心語の場合と名詞化標識を伴う句が中心語の場合に分けて記述する。代名詞が中心語の場合は名詞化標識を伴う句と同様のふるまいを見せる。

### 2.1. 名詞が中心語の場合

名詞が中心語である場合の名詞句内部の要素の配列は次のようになる。

(指示詞)-(修飾句)-名詞-(形容詞)-(数量詞)-(数詞)-(指示詞)-格標識

最も単純な名詞句は、音形として名詞のみからなり、絶対格もしくは位格に置かれている(音形なしの格)場合である。以下、 $\text{p}^{\text{h}}\text{a}?$ 「ぶた」を中心語とする例をあげる。

- |       |   |   |   |
|-------|---|---|---|
| (1) a | $\text{p}^{\text{h}}\text{a}?$ -φ<br>ぶた -ABS<br>ぶた                      | b | $\text{p}^{\text{h}}\text{a}?$ $\text{nə}$ -φ<br>ぶた   これ -ABS<br>このぶた                 |
| c     | $\text{ti}$ : $\text{p}^{\text{h}}\text{a}?$ -φ<br>あれ   ぶた -ABS<br>あのぶた | d | $\text{p}^{\text{h}}\text{a}?$ $\text{t}\text{c}\text{u}$ -φ<br>ぶた   10-ABS<br>10匹のぶた |

e ˈpʰaʔ ˈka: pu ˈdə zi- ɸ  
 ぶた 白い 1 (QTF)-ABS  
 1 匹の白いぶた

## 2.2. 名詞化標識を伴う句が中心語の場合

名詞化標識を伴う句が中心語である場合の名詞句の構造は、以下のように単純である。

名詞化標識つき名詞句 - 格標識

このうち、名詞化標識つき名詞句の内部については動詞句の構成に準じ、名詞化標識は動詞語幹に直接後続する。名詞化標識を用いて名詞化された句は、それ自体名詞と同様に機能するとき、名詞と同様に格標識による標示が求められる。

(2) ˈtɕõ-zu- ɸ ˈjoʔ loʔ  
 着る -NML-ABS EXV  
 着るものがあります。

(3) ˈse- ɸ -də ˈso-zu- ɸ ˈji ɳõ  
 ごはん -ABS-TOP 食べる -NML-ABS CPV  
 ごはんとは食べるものです。

(4) ˈka ˈpu- ˈre: mə- ɸ -də ˈmjẽ xwa ˈɳõ  
 白い -NML-ABS-TOP 綿花 CPV  
 白いのは綿花です。

名詞化接辞は行為者 (A) を含む動詞句を名詞化することができない (2.1 参照)。そのため、行為者 (A) が能格で現れている場合は、行為者は名詞化対象の動詞句に含まれていないと解釈する。

(5) ˈtɕə lə-ɣə ˈtɕə wə- ɸ ˈzi-zu- ɸ ˈji ɳõ  
 猫 -ERG ねずみ -ABS 捕まえる -NML-ABS CPV  
 a. 猫とはねずみを捕まえるもの [動物] です。  
 b. ねずみを捕まえるのは猫が [やること] です。

### 3. 修飾構造

修飾構造については、一般の修飾表現と所有表現に分けて記述する。

#### 3.1. 修飾表現

形容詞によって修飾句を形成する場合は、被修飾名詞（句）に形容詞が後続する形で現れる。また、文脈が明示的である場合は被修飾名詞（句）は省略可能である。

- (6)    ʼtõ-ce        ʼluʔ p<sup>h</sup>õ    <sup>h</sup>ka pu-de    ʼnã bu-φ-γə    ʼnõ  
          パンダ -GEN   体            白い -ABL      黒い -ABS-TOP      少ない  
          パンダの体は白より黒の方が少ないです。

この例では、形容詞「黒い」の被修飾名詞句は「パンダの体」であるが、それが音形式として現れていないと解釈する。

疑問詞「どんな」が名詞を修飾する場合、疑問詞は前置される。

- (7)    ʼtɕ<sup>h</sup>ɑʔ    ʼ<sup>h</sup>tɕi    ʼlu-φ    ʃi  
          2.ABS   何            年 -ABS    CPV  
          あなたは（干支は）何年ですか？

名詞化接辞によって修飾句を形成する場合は、被修飾名詞（句）を外部から修飾せず、主部内在型の構造をとる。この場合の名詞化には特別の接辞 /ŋwo/ が用いられ、これ以外の用法をもたないことから、形容詞化接辞とも呼べるだろう。この接辞を用いて動詞句を名詞化する場合、動詞句の構造にもまた変更が加わり、名詞化対象の句の行為者 (A) は能格ではなく属格で現れる。

- (8)    ʼŋeʔ    ʼtə-ce    ʃi ʃi-φ    ʼtə-ŋwo-φ    ʼŋo ʃ<sup>h</sup>i:  
          1.ERG   3-GEN   字 -ABS    書く -NML-ABS      識別できる  
          私は彼の書いた字を識別できます。

この例では、動詞 /ʼŋo ʃ<sup>h</sup>i:/「識別できる」の行為者 (A) が /ʼŋeʔ/「私」、被動者 (P) が /ʃi ʃi/「字」を文の基本構造とし、P に /ʼtə-gə ʼtə/「彼が書く」という要素を接辞 /-ŋwo/ によって「形容詞化」して埋め込んでいるといえる。

ただし非修飾対象の名詞（句）に修飾句を後置する例もある。名詞化の用例は非常に少ない。それが Sogpho 方言を特徴づける要素であるのかもしれないが、調査が不十分であるということは否めない。



### 3.2. 所有表現

所有表現は属格を用いて表現する。所有者に属格を配し，所有物に前置して表す。所有以外にも所属，属性などの関係を表す場合にも同様の構造が用いられる。

(9) ʼŋ ce ʼja:  
 1.GEN ヤク  
 私のヤク

(10) ʼtʰa sʰi-ce ʼtʰõ cwo  
 PSN-GEN クラスメート  
 タシのクラスメート

(11) ʼtu-ce ʼsʰa ŋã  
 小麦-GEN 種  
 小麦の種

### 略号

語釈に用いる略号は以下のようなものである。ただし，形態素の意味がよく分かっていないものには語形をそのまま提示している。

1	1 人称	EXV	存在動詞
2	2 人称	GEN	属格
3	3 人称	NML	名詞化標識
ABS	絶対格	PSN	人名
CPV	判断動詞	QTF	量詞
ERG	能格	TOP	主題標識

また，複数の略号が1つの語形に重なるとき，. で区切って示す（たとえば 1.ERG など）。

## 付録：Sogpho 方言の音体系

概要を以下に示す。詳細は鈴木（2005）を参照。

### 声調

声調は語単位でかかる。

ˉ : 高平      ˊ : 上昇      ˆ : 上昇下降  
 ˋ : 低平      ˋ : 下降

### 母音

以下の各母音につき、長 / 短，鼻母音 / 非鼻母音の対立がある。

ɿ	i	u	u
e	ə ə	o	
ɛ		ɔ	
a	a		

### 子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧を示す。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	
	無気	p	t	t̚	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̚	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無気	φ	s	ʃ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʝ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

子音連続のパターンとして、主だったものに前鼻音，前気音，初頭両唇閉鎖音などがある。

## 参考文献

- 鈴木博之. 2005. 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号. 96–104.
- . 2007. 「カムチベット語方言の多様性から見る丹巴県チベット語の方言特徴」『人文知の新たな総合に向けて』第 5 回報告書下巻. 231–249.
- . 2010. 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）の格体系」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』95–108, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2013. 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における文の下位分類」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』139–150, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Suzuki, Hiroyuki. 2008. *Historical position of Danba Tibetan among Khams Tibetan dialects*, paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan (Taipei) [in: *Pre-workshop Proceedings* 419–439].
- . 2009. “Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography – a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan –”. In: Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet – New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology.
- . 2011. “Dialectal particularities of Sogpho Tibetan – An introduction to the “Twenty-four villages’ patois” –”. In Mark Turin & Bettina Zeisler (eds.) *Himalayan Languages and Linguistics: Studies in Phonology, Semantics, Morphology and Syntax*, 55–73, Brill.
- 徐君. 2001. 〈梭坡藏族田野考察報告〉郎維偉・艾建主編《大渡河上游丹巴藏族民間文化考察報告》27–59, 成都：四川省民族研究所.

## 付記

筆者による Sogpho 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- ・平成 16–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 16102001)
- ・平成 19–21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- ・平成 21–22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 21251007)
- ・平成 25–26 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之, 課題番号 25770167)